

平成30年9月期 決算短信〔日本基準〕(連結)

平成30年11月14日

上場会社名 日本フォームサービス株式会社 上場取引所 東
 コード番号 7869 URL http://forvice.co.jp
 代表者 (役職名)取締役社長 (氏名)山下 岳英
 問合せ先責任者 (役職名)総務部長代理 (氏名)小坂 嘉彦 (TEL)03(3636)0011
 定時株主総会開催予定日 平成30年12月20日 配当支払開始予定日 平成30年12月21日
 有価証券報告書提出予定日 平成30年12月20日
 決算補足説明資料作成の有無 : 無
 決算説明会開催の有無 : 無

(百万円未満切捨て)

1. 平成30年9月期の連結業績(平成29年10月1日～平成30年9月30日)

(1) 連結経営成績 (%表示は対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する 当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
30年9月期	2,771	0.8	△135	—	△34	—	△623	—
29年9月期	2,748	△9.7	△90	—	4	△78.9	△23	—

(注) 包括利益 30年9月期 △633百万円(—%) 29年9月期 △15百万円(—%)

	1株当たり 当期純利益	潜在株式調整後 1株当たり 当期純利益	自己資本 当期純利益率	総資産 経常利益率	売上高 営業利益率
	円 銭	円 銭	%	%	%
30年9月期	△1,565.14	—	△23.0	△0.8	△4.9
29年9月期	△59.00	—	△0.8	0.1	△3.3

(参考) 持分法投資損益 30年9月期 一百万円 29年9月期 一百万円

(注) 当社は、平成30年4月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式へ移行が行われたと仮定して、「1株当たり当期純利益」を算定しております。

(2) 連結財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産
	百万円	百万円	%	円 銭
30年9月期	4,001	2,382	59.5	5,982.08
29年9月期	4,652	3,035	65.2	7,622.90

(参考) 自己資本 30年9月期 2,382百万円 29年9月期 3,035百万円

(注) 当社は、平成30年4月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式へ移行が行われたと仮定して、「1株当たり純資産」を算定しております。

(3) 連結キャッシュ・フローの状況

	営業活動による キャッシュ・フロー	投資活動による キャッシュ・フロー	財務活動による キャッシュ・フロー	現金及び現金同等物 期末残高
	百万円	百万円	百万円	百万円
30年9月期	17	△99	△4	99
29年9月期	163	121	△179	186

2. 配当の状況

	年間配当金					配当金総額 (合計)	配当性向 (連結)	純資産 配当率 (連結)
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計			
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	百万円	%	%
29年9月期	—	0.00	—	5.00	5.00	19	—	0.7
30年9月期	—	0.00	—	50.00	50.00	19	—	0.7
31年9月期(予想)	—	0.00	—	50.00	50.00		—	

(注) 当社は、平成30年4月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。これに伴い、平成30年9月期及び平成31年9月期(予想)の1株当たり期末配当金につきましては、当該株式併合後の金額を記載しております。

3. 平成31年9月期の連結業績予想（平成30年10月1日～平成31年9月30日）

（％表示は、通期は対前期、四半期は対前年同四半期増減率）

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する当期純利益		1株当たり 当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期(累計)	1,793	7.5	5	—	54	645.9	21	—	5,552.62
通期	3,360	21.2	△44	—	66	—	26	—	6,874.67

※ 注記事

(1) 期中における重要な子会社の異動（連結範囲の変更を伴う特定子会社の異動）： 無

(2) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更： 無
 ② ①以外の会計方針の変更： 無
 ③ 会計上の見積りの変更： 無
 ④ 修正再表示： 無

(3) 発行済株式数（普通株式）

① 期末発行済株式数（自己株式を含む）	30年9月期	402,000株	29年9月期	402,000株
② 期末自己株式数	30年9月期	3,782株	29年9月期	3,766株
③ 期中平均株式数	30年9月期	398,230株	29年9月期	398,285株

(注) 当社は、平成30年4月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して、「期末発行済株式」、「期末自己株式」及び「期中平均株式数」を算出しております。

(参考) 個別業績の概要

1. 平成30年9月期の個別業績（平成29年10月1日～平成30年9月30日）

(1) 個別経営成績（％表示は対前期増減率）

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
30年9月期	2,470	△5.0	△100	—	6	414.4	△581	—
29年9月期	2,601	△12.3	△96	—	1	△90.2	△26	—

	1株当たり当期純利益	潜在株式調整後 1株当たり当期純利益
	円 銭	円 銭
30年9月期	△1,461.05	—
29年9月期	△65.60	—

(注) 当社は、平成30年4月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式へ移行が行われたと仮定して、「1株当たり当期純利益」を算定しております。

(2) 個別財政状態

	総資産		純資産		自己資本比率		1株当たり純資産
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
30年9月期	3,921	—	2,370	—	60.5	—	5,953.22
29年9月期	4,500	—	2,982	—	66.3	—	7,489.95

(参考) 自己資本 30年9月期 2,370百万円 29年9月期 2,982百万円

(注) 当社は、平成30年4月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式へ移行が行われたと仮定して、「1株当たり純資産」を算定しております。

2. 平成31年9月期の個別業績予想（平成30年10月1日～平成31年9月30日）

（％表示は、通期は対前期、四半期は対前年同四半期増減率）

	売上高		経常利益		当期純利益		1株当たり当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期(累計)	1,643	16.2	38	—	15	—	3,966.16
通期	3,096	25.3	47	589.1	18	—	4,759.39

※ 決算短信は公認会計士又は監査法人の監査の対象外です

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項については添付資料P. 2「1. 経営成績・財政状態に関

する分析（1）経営成績に関する分析」をご覧ください。

○添付資料の目次

1. 経営成績・財政状態に関する分析	2
(1) 経営成績に関する分析	2
(2) 財政状態に関する分析	3
(3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当	5
2. 企業集団の状況	6
3. 経営方針	8
(1) 会社の経営の基本方針	8
(2) 目標とする経営指標	8
(3) 中長期的な会社の経営戦略	9
(4) 会社の対処すべき課題	10
(5) その他、会社の経営上重要な事項	10
4. 会計基準の選択に関する基本的な考え方	11
5. 連結財務諸表	12
(1) 連結貸借対照表	12
(2) 連結損益計算書及び連結包括利益計算書	14
連結損益計算書	14
連結包括利益計算書	15
(3) 連結株主資本等変動計算書	16
(4) 連結キャッシュ・フロー計算書	17
(5) 連結財務諸表に関する注記事項	18
(継続企業の前提に関する注記)	18
(セグメント情報等)	18
(1株当たり情報)	20
(重要な後発事象)	20

1. 経営成績・財政状態に関する分析

(1) 経営成績に関する分析

当連結会計年度におけるわが国経済は、政府の経済政策や日銀の金融緩和政策を背景に、企業収益・雇用情勢は緩やかな改善が続き、景気は緩やかな回復基調にて推移いたしました。一方、原材料価格の高騰や米国の通商政策を巡る対立激化による影響から、依然として先行きは不透明な状況が続いております。

このような状況の下、当社グループの売上高は27億7千1百万円（前年同期比0.8%増）、営業損失1億3千5百万円（前年同期比4千5百万円の悪化）、経常損失3千4百万円（前年同期比3千9百万円の悪化）、親会社株主に帰属する当期純損失は減損損失を5億7千3百万円計上したことから、6億2千3百万円（前年同期比5億9千9百万円の悪化）となりました。

セグメント別の業績を示すと、次のとおりであります。

① 函物及び機械設備関連事業

函物及び機械設備関連事業において、デジタルサイネージ関連製品及びアーム関連製品の受注が売上に寄与しております。官公庁向け製品については受注を得られてはいるものの、主力となる19インチラックに関しては社内設備の需要減少による影響が顕著に見られ、再生エネルギー関連製品に関しても、FIT改正法による売電価格の影響により太陽光発電案件等の需要が減少してきております。デジタルサイネージ関連製品の納入に工事を含めた大型案件も受注を得られておりますが、工事の延期等に起因し、当初予定の売上高は確保することができませんでした。

利益面につきましては、生産ラインの見直しによる製品製造の標準化を図り、原材料費の見直しや生産性の向上に努めることで原価低減をすすめており、少しずつ成果も表れてきております。しかし、工事施工を請け負う関連子会社において、売上高は確保できてはいるものの、大口案件に対する追加工事等が発生し、原価が増加したことや自社製品の取り込みが当初計画よりも大きく減少したこと等の要因により当初計画の利益が確保できませんでした。

以上の結果、函物及び機械設備関連事業の売上高は21億4千4百万円（前年同期比1.3%増）、セグメント損失（経常損失）は3千8百万円（前年同期比6千9百万円の悪化）となり、非常に厳しい状況にて推移いたしました。

② 介護関連事業

介護関連事業において、当社グループの在宅介護サービスのうち通所介護および訪問介護、居宅介護支援の稼働率が上がっているものの、それに応じた人材確保が追い付かず、さらには介護保険法の改正による介護報酬の減少の影響もあり、売上高は3億3千5百万円（前年同期比3.0%増）となりました。

地域密着型介護サービスにおける小規模多機能型居宅介護においては前年に引き続き利用者は増加しております。しかし、認知症対応型共同生活介護サービスにおいては、江戸川区松江及び杉並区松庵にて稼働しているグループホームのどちらについても常時満床の状況を維持できなかったことにより、売上高は2億9千1百万円（前年同期比4.9%減）となりました。

以上の結果、介護関連事業（在宅介護サービス及び地域密着型介護サービス）における売上高は6億2千7百万円（前年同期比0.8%減）となりました。利益面に関しては、コスト削減や、海辺及び亀戸包括支援センターの運営に伴う補助金を得られた結果、セグメント利益（経常利益）は4百万円（前年同期比3千万円の改善）となりました。

次期の業績見通し

今後の経済の見通しにつきましては、国内株式市場や企業業績等の持ち直し、雇用改善など一部に明るい兆しはあるものの、消費税増税による個人の消費動向や欧米の景気動向が懸念されるなか、実体経済への影響は依然不透明な状況で推移し、未だ予断を許さない状態が継続するものと予測しております。

このような状況をふまえ、当社グループにおける函物及び機械設備関連事業におきましては、顧客からの低価格化の要求は依然として厳しいことと思われませんが、当社グループのブランド力を高めるとともに、再生エネルギー関連製品、環境関連製品に加え、東京オリンピック開催に向け、新規市場（デジタルサイネージ市場等）開拓を実施し、営業基盤の整備を行います。特に、当社グループの新しい基軸となる製品である、高級感を兼ね備えた自由度の高い空間演出を可能とする「MIRRAD」、AI・IOT等新技術構築の為の次世代データセンターファシリティ「液浸冷却装置（Ice raQシリーズ）」の2種を市場へ投入し拡販に努めます。さらには、製造面において生産体制の強化並びに製造ラインの平準化及び営業との連携を強め原価低減を進めることで、価格競争からの脱却を図ります。

以上により、函物及び機械設備関連事業の売上高は27億9百万円（前年同期比20.8%増）、経常利益については6千2百万円（前年同期比162.3%増）を見込んでおります。

介護関連事業の在宅介護サービスにおいては、理学療法士等のいる「訪問看護ステーション」において新規出店を視野に入れ更なる営業強化を図ります。また、従来から引き続き顧客確保を第一と念頭におくと共に継続的なコスト削減等により利益の追求に努めます。

地域密着型介護サービスにおいて、認知症対応型共同生活介護は居室稼働率の安定を図ること、さらに新施設の開設を検討いたします。また、小規模多機能型居宅介護の新規顧客確保に努めることにより、介護関連事業（在宅介護サービス及び地域密着型介護サービス）の売上高については6億5千1百万円（前年同期比3.6%増）、経常利益については、3百万円（前年同期比26.8%減）を見込んでおります。

以上、当社グループの平成31年9月期における売上高は33億6千万円（前年同期比21.2%増）、営業損失については4千4百万円（前年同期比9千1百万円の改善）、経常利益については6千6百万円（前年同期比1億円の改善）、親会社株主に帰属する当期純利益については2千6百万円（前年同期比6億5千万円の改善）を見込んでおります。

(2) 財政状態に関する分析

①資産、負債及び純資産の状況

(資産)

当連結会計年度末の資産の合計は、40億1百万円となり、前連結会計年度末に比べて6億5千1百万円減少いたしました。主な要因は、たな卸資産が5千8百万円増加した一方、現金及び預金が6千万円、受取手形及び売掛金が3千2百万円、減損損失の計上により土地が4億8千3百万円減少したことによるものであります。

(負債)

当連結会計年度末の負債の合計は、16億1千9百万円となり、前連結会計年度末に比べて2百万円減少いたしました。主な要因は、買掛金が6千1百万円、短期借入金が2億5百万円増加した一方、長期借入金が1億7千9百万円減少したことによるものであります。

(純資産)

当連結会計年度末の純資産の合計は、23億8千2百万円となり、前連結会計年度末に比べて6億5千3百万円減少いたしました。主な要因は、親会社株主に帰属する当期純損失（純資産の減少）6億2千3百万円及び剰余金の配当（純資産の減少）が1千9百万円あったことによるものであります。

②キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末に比べ8千6百万円減少し9千9百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は、1千7百万円（前連結会計年度は1億6千3百万円の収入）となりました。これは主として、減損損失が5億7千3百万円、減価償却費が7千9百万円、売上債権の減少が3千2百万円、仕入債務の増加が6千1百万円あったことに対して、税金等調整前当期純損失が6億1千3百万円、たな卸資産の増加が5千8百万円あったことによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は、9千9百万円（前連結会計年度は1億2千1百万円の収入）となりました。これは主として、定期預金の払戻しによる収入が4千万円、投資有価証券の売却による収入が2千万円あったことに対して、定期預金の預入による支出が6千6百万円、有形固定資産の取得による支出が9千3百万円あったことによるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果使用した資金は、4百万円（前連結会計年度は1億7千9百万円の支出）となりました。これは主として、長期借入金の返済による支出が1億7千9百万円、リース債務の返済による支出が1千1百万円あったことに対して、短期借入金の純増額が2億5百万円あったことによるものであります。

（参考）キャッシュ・フロー関連指標の推移

	平成26年9月期	平成27年9月期	平成28年9月期	平成29年9月期	平成30年9月期
自己資本比率	61.2	59.7	60.5	65.2	59.5
時価ベースの自己資本比率	23.7	20.4	17.3	25.3	32.1
キャッシュ・フロー対有利子負債比率	5.1	4.8	98.9	106.0	67.6
インタレスト・カバレッジ・レシオ	13.6	17.9	△1.9	16.0	2.0

自己資本比率：自己資本／純資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額／総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債／キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：キャッシュ・フロー／利払い

（注1）いずれも連結ベースの財務数値により計算しています。

（注2）株式時価総額は自己株式を除く発行済株式数をベースに計算しております。

（注3）キャッシュ・フローは営業キャッシュ・フローを利用しております。

(3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当

当社は、安定した経営基盤の確立を目指すとともに、株主の皆様に対する利益配分を最重要政策の一つと認識して、収益力の強化に努め、安定した配当を継続することを基本方針として考えております。

内部留保金の使途につきましては、財務体質の強化及び長期的な視点に立った製造設備投資、生産・販売基幹システムへの投資等の資金需要に備えるとともに、将来のさらなる展開のための研究開発への投資等に資金を投入していく所存であります。

このような方針に基づき、当期の期末配当金を、株主の皆様のご支援に感謝の意を表すため、1株につき50円の普通配当を予定しております。また、次期の配当につきましては、年間50円（期末配当50円）を予定しております。

2. 企業集団の状況

当社グループは、当社と連結子会社であるフォービステクノ㈱及びフォービスリンク㈱で構成されております。その主な事業内容と当該事業における当社及び連結子会社の位置付けは次のとおりであります。

なお、この区分はセグメント情報の区分と同一であります。

函物及び機械設備関連事業において当社グループはサーバーラック、モニター設置・固定用金具及びアーム製品、デジタルサイネージ関連機器、再生エネルギー等関連機器の製造販売及びこれらに附帯する業務を主な内容として事業活動を行っております。

連結子会社であるフォービステクノ㈱は、主に当社の主力製品のひとつであるアーム製品の製造を事業としております。また、フォービスリンク㈱は、主に再生エネルギー関連製品の設計・施工・メンテナンス及び電気工事を事業として展開しております。

また、介護関連事業の在宅介護サービスにおいては、東京都江東区、江戸川区に合計4拠点(拠点名称「フォービスライフ」)を設置し、フォービスライフ江東において通所介護事業を展開しており、地域福祉の発展にも貢献しております。また、在宅介護事業の位置付けの中で平成19年4月に江東区委託事業の「在宅介護支援センター」の認可を得ております。

介護関連事業の地域密着型介護サービスにおいては、東京都江戸川区松江並びに杉並区松庵に認知症対応型共同生活介護を設置し、事業を展開しております。また、江戸川区松江の施設内にて小規模多機能型居宅介護の事業を展開しております。

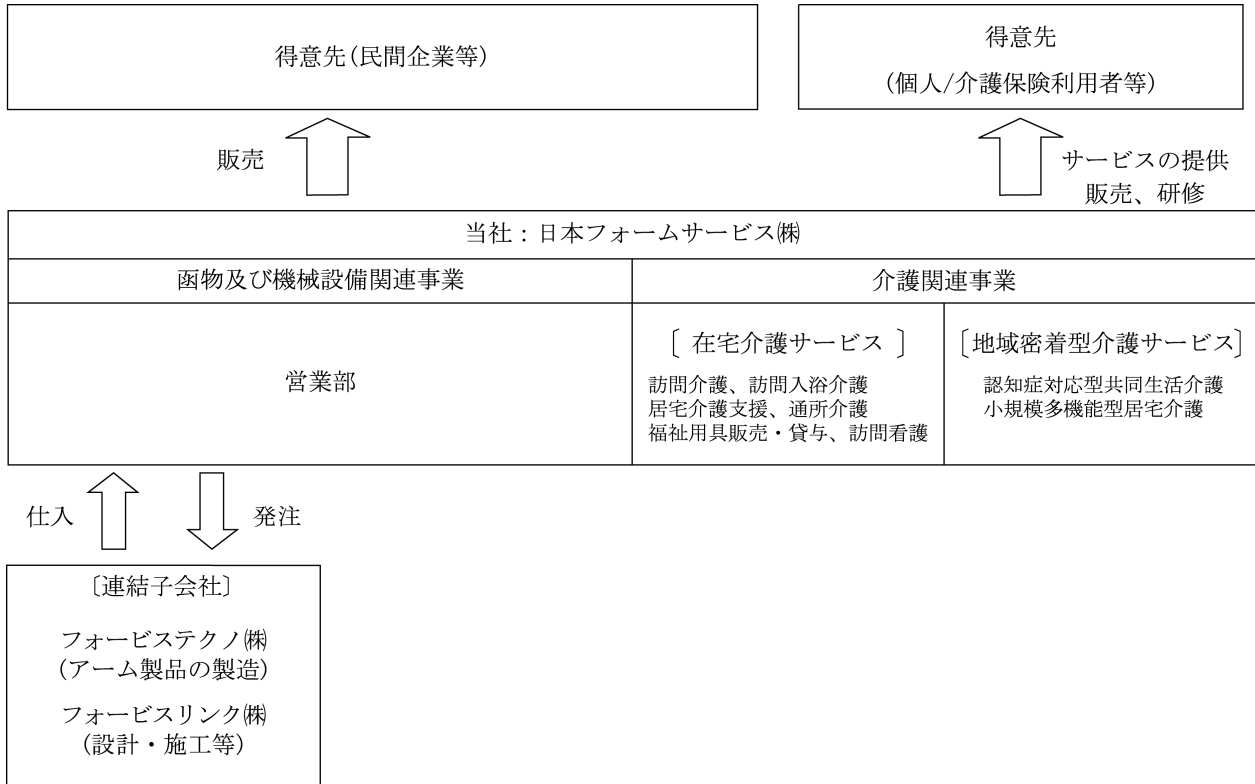
当社の主な取扱い製品及びサービスは、次のとおりであります。

区分		主要品目・サービス			
函物及び 機械設備 関連事業	函物	磁気テープ関連	MT(磁気テープ)キャビネット、CMT(カートリッジ磁気テープ)棚、CMTオープンラック、CMTキャビネット、CMT(カートリッジ磁気テープ)用トランク	販売 → 附帯業務	得意先 → 官公庁 NTT及びその グループ企業 民間企業等
		集積回路関連	ICパッケージキャビネット、計測器キャビネット、ICパッケージ用トランク		
		通信関連	19インチラック、モデムラック、モニコンラック、サーバーラック、バルーンアーム、ジョイントアーム、コブラアーム、壁掛け金具、天吊り金具、LCDスタンド		
		その他	多機能ラック、ファイルキャビネット、OAテーブル・椅子、移動ラック、太陽光パネル設置用架台		
	機械設備	収納ロボット(自動倉庫)、ロータリーラック			
介護関連 事業	介護	居宅介護支援、訪問介護、訪問入浴介護、福祉用具貸与・販売、認知症対応型共同生活介護、通所介護、小規模多機能型居宅介護、訪問看護	サービスの 提供 → 販売、研修	得意先 → 個人 (介護保険利用者等)	

当社グループは、当社と連結子会社であるフォービステクノ㈱及びフォービスリンク㈱で構成されております。

〈事業の系統図〉

当事業の系統図は、次のとおりであります。



3. 経営方針

(1) 会社の経営の基本方針

当社は、昭和31年10月に設立以来、一貫して多様化、高度化していく情報化社会における事務の効率化に寄与すること、また、ユーザーのニーズを組み込んだ製品開発でノウハウを蓄積し、特別注文に対応できる生産体制を構築し、顧客に密着した提案営業を推進してその信頼を得ることにより社会貢献することを使命としております。

この基本方針の下、当社は「高付加価値製品の開発」「製品の品質の高度化」に積極的に取り組み、当社の実力を発揮出来る分野に経営資源を集中すると共に、「財務体質の強化」を中心とした企業運営の強化と社内外に対して判りやすい「透明度の高い経営」の実践を心がけております。

また、社員一人ひとりが顧客重視を念頭に置き、自立したビジネスパーソンとしてお客様や株主等の各ステークホルダーに貢献していきます。

さらに当社は、今後ともIT関連技術の急速な進歩及び経営環境の変化に的確に対応すると共に『企業価値』の増大を図ってまいります。

当社としては、函物及び機械設備関連事業においては次の項目を重要施策と位置付け、全社一丸となって取り組んでおります。

- ① 新製品開発力の強化（世界に通用する製品の開発、他にはない独自の製品開発）
- ② 自然エネルギー分野である創エネ・省エネ環境ビジネスに特化した独自製品の市場投入
- ③ 製造部門の効率化及びコスト意識の向上と原価の低減
- ④ 営業力強化による収益安定強化及び優秀な技術者の育成・指導
- ⑤ 無駄のない「スリムで収益力の高い企業体質の維持」

また、当社は介護保険法の発足と同時に介護関連ビジネスに進出し、在宅介護サービス面において地域密着型の営業展開を進めております。

当社の介護関連事業においては、「地域密着」が基本であると考えており、いたずらに拠点拡大に走ることなくサービス内容の充実・質の向上を図ることで地域福祉の発展・拡充に貢献すること、さらに今後の高齢者社会に従事したサービスを展開することを経営理念としております。

(2) 目標とする経営指標

当社が事業展開するにあたり最優先しているものは「収益力の向上」であります。具体的な経営指標としては自己資本当期純利益率（ROE）、売上高経常利益率を重視しており、ROE 10%以上、売上高経常利益率15%以上を中長期的な目標と考えております。

(3) 中長期的な会社の経営戦略

当社は「安定成長に向けた事業基盤の強化」「経営資源の選択と集中」「組織の活性化及び活力ある人材の育成」を基本戦略とし環境の変化に柔軟に対応できる企業体質の確立に努めてまいります。

主な取り組みと進捗状況は以下の通りであります。

① 函物及び機械設備関連事業

当社は引続き当社の強みである「少量多品種生産」により客先要望に応じたカスタム製品の投入を提案営業を中心に高付加価値製品の販売を強化すると共に、採算重視を念頭に置き利益確保を徹底してまいります。

ITソリューションにおいては「情報通信サーバーの収納」のパイオニアとして高度な事業ノウハウと多彩なラインナップにより高度化、多様化する情報管理ニーズに柔軟に対応できる製品の開発に注力してまいります。来期より制御盤や配電盤分野の事業にも着手し、さらには新商品である「液浸冷却装置 (Ice raQシリーズ)」の販売が始まることもあり、より一層のラインナップの拡充を図ることとなります。昨今、情報漏えい問題が多発するなか、セキュリティ関連製品の開発・販売についても注力してまいります。

また、再生エネルギー関連製品を成長事業へ発展させるべく、太陽光関連製品を提案から製作、施工、メンテナンスまでのトータルソリューションとして拡販を図ります。

モニタリングソリューションにおいては、駅や商業施設などで大型液晶ディスプレイを用いて情報を発信するデジタルサイネージが主流になっており、東京オリンピック向けの大型需要の取り込みを視野に入れております。さらには当社の新製品である「MIRRAD」を来期初頭に市場に投入する予定です。アーム関連事業においては医療市場や半導体市場を主なマーケットと捉え、顧客ニーズによりマッチした製品開発・販売に一層注力してまいります。

当社は搬送、収納、管理システムのパイオニアとして設備の提案から設計、製作、施工、アフターメンテナンスまでをトータルにサポートする一貫サービス体制を確立しております。

国内外のFAシステムから液晶表示装置、さらにはクリーンルーム対応設備まで幅広い分野の収納、管理システムニーズにお応えしてまいります。

② 介護関連事業

在宅介護サービスにおいては、引続き地域密着型の事業展開を推進し、着実に地元の信頼を獲得し「エリアNo.1事業者」の地位を不動なものにいたします。

拠点展開については業績を十分勘案の上、地盤内拠点のさらなる充実と共に、チャンスを見ても、東京都近郊にも積極的に展開を図ってまいります。

地域密着型介護サービスにおいては、認知症対応型共同生活介護の入居者を常時満室(3ユニット/27名)に近い状態に確保してまいります。

また、2018年初頭の介護保険法の改正をビジネスチャンスととらえ、地域密着型のサービスの徹底と介護予防システムの確立に注力してまいります。多様化する利用者ニーズに応じた高品質のサービスを確立することで競争激化を勝ち抜いていきたいと考えております。

③ 経営基盤の強化

当社は今後の業績を勘案し、諸経費の削減などを含む収益確保のための施策を実施しております。

さらに、今後の安定的な業績を確保すべく、社長をリーダーとして各事業部門に業績面での進捗を常時把握し適切な方針ならびに戦略を打ち出せる体制をとっております。

(4) 会社の対処すべき課題

今後当社が現在の激動する市場に対応し生き残っていくためには、提案から製作・施工に至るまでのトータルソリューションメーカーとして自ら変革していかなければならないと考えております。

そのためには、函物及び機械設備関連事業においては、従来の商品群や市場に対する拡販やサポートに加えて、新規商材の企画・開発と市場投入及び新規市場の創設、開拓が最も重要なポイントとなってまいります。顧客のニーズにお応えし、満足していただける提案を行うためには、個々の案件をスピーディーに確実にこなしていかなければならないと考えております。さらに、異分野への営業展開を実施し、製品群及び価格の見直しを行うことに注力いたします。

また、介護関連事業においては、効率的な事業運営とともに、営業力強化を図り、収益体質を持続していかなくては、ますます厳しい環境が予想される介護業界では生き残れないと判断しております。

さらに、今後は企業の内部統制システムの運用がますます重要となってきております。当社は、内部管理体制の強化と柔軟な組織体制の両立を目指し、企業価値を一層高めるために、コーポレート・ガバナンスの強化に努めてまいります。

以上のような課題を着実に実行するための人材の確保・育成も必要であり、人材の能力開発を図るべく、教育制度の充実や一層のモチベーション向上に資する人事制度の構築を図るとともに、有能な人材の積極的な登用も継続して行ってまいります。

(5) その他、会社の経営上重要な事項

該当事項はありません。

4. 会計基準の選択に関する基本的な考え方

当社グループは、連結財務諸表の期間比較可能性及び企業間の比較可能性を考慮し、当面は、日本基準で連結財務諸表を作成する方針であります。

なお、IFRSの適用につきましては、国内外の諸情報を考慮の上、適切に対応していく方針であります。

5. 連結財務諸表及び主な注記

(1) 連結貸借対照表

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成29年9月30日)	当連結会計年度 (平成30年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	363,960	303,711
受取手形及び売掛金	511,876	478,987
商品及び製品	79,630	89,793
仕掛品	17,012	13,613
原材料	158,664	210,714
繰延税金資産	10,165	8,139
その他	74,621	46,529
貸倒引当金	△250	△250
流動資産合計	1,215,681	1,151,239
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	1,921,819	1,895,164
減価償却累計額	△980,920	△1,012,775
建物及び構築物（純額）	940,898	882,389
機械装置及び運搬具	632,023	647,408
減価償却累計額	△523,577	△539,006
機械装置及び運搬具（純額）	108,446	108,402
土地	2,206,948	1,723,212
リース資産	195,198	177,508
減価償却累計額	△123,923	△118,774
リース資産（純額）	71,275	58,733
建設仮勘定	9,000	20,197
その他	166,458	164,445
減価償却累計額	△156,479	△158,792
その他（純額）	9,979	5,652
有形固定資産合計	3,346,549	2,798,588
無形固定資産		
リース資産	914	-
その他	12,416	9,707
無形固定資産合計	13,330	9,707
投資その他の資産		
投資有価証券	43,762	10,699
関係会社株式	10,000	10,000
繰延税金資産	31	-
その他	23,172	20,998
投資その他の資産合計	76,966	41,698
固定資産合計	3,436,846	2,849,994
資産合計	4,652,528	4,001,233

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成29年9月30日)	当連結会計年度 (平成30年9月30日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	44,859	106,035
短期借入金	742,500	948,477
1年内返済予定の長期借入金	179,385	117,060
リース債務	14,905	14,443
未払法人税等	7,854	19,441
賞与引当金	13,180	8,080
その他	213,731	160,635
流動負債合計	1,216,416	1,374,173
固定負債		
長期借入金	152,060	35,000
リース債務	65,260	52,968
役員退職慰労引当金	115,016	119,151
繰延税金負債	42,776	32,768
その他	25,300	4,997
固定負債合計	400,413	244,886
負債合計	1,616,830	1,619,059
純資産の部		
株主資本		
資本金	395,950	395,950
資本剰余金	230,000	230,000
利益剰余金	2,412,010	1,768,812
自己株式	△15,486	△15,516
株主資本合計	3,022,474	2,379,246
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	13,222	2,927
その他の包括利益累計額合計	13,222	2,927
純資産合計	3,035,697	2,382,173
負債純資産合計	4,652,528	4,001,233

(2) 連結損益計算書及び連結包括利益計算書

連結損益計算書

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成29年10月1日 至 平成30年9月30日)
売上高	2,748,824	2,771,995
売上原価	1,995,162	2,084,258
売上総利益	753,662	687,736
販売費及び一般管理費		
運賃及び荷造費	101,835	86,648
役員報酬	73,507	72,438
給料及び手当	282,648	302,914
法定福利費	52,724	52,733
賞与引当金繰入額	5,166	3,336
役員退職慰労引当金繰入額	3,930	4,135
減価償却費	26,954	23,746
その他	297,418	277,341
販売費及び一般管理費合計	844,184	823,293
営業損失(△)	△90,522	△135,557
営業外収益		
受取利息	43	19
受取配当金	1,065	1,136
補助金収入	69,715	95,902
その他	37,763	16,010
営業外収益合計	108,588	113,068
営業外費用		
支払利息	10,199	8,749
支払手数料	2,510	2,880
その他	484	356
営業外費用合計	13,194	11,986
経常利益又は経常損失(△)	4,871	△34,475
特別利益		
投資有価証券売却益	-	19,680
特別利益合計	-	19,680
特別損失		
固定資産売却損	30,115	-
固定資産除却損	-	2,511
減損損失	3	573,229
たな卸資産処分損	-	23,288
特別損失合計	30,119	599,028
税金等調整前当期純損失(△)	△25,247	△613,823
法人税、住民税及び事業税	4,835	12,868
法人税等調整額	△6,595	△3,405
法人税等合計	△1,760	9,462
当期純損失(△)	△23,487	△623,286
親会社株主に帰属する当期純損失(△)	△23,487	△623,286

連結包括利益計算書

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成29年10月1日 至 平成30年9月30日)
当期純損失(△)	△23,487	△623,286
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	8,262	△10,295
その他の包括利益合計	8,262	△10,295
包括利益	△15,224	△633,581
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△15,224	△633,581

(3) 連結株主資本等変動計算書

前連結会計年度(自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)

(単位：千円)

	株主資本					その他の包括利益累計額		純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	395,950	230,000	2,455,414	△15,240	3,066,124	4,960	4,960	3,071,084
当期変動額								
剰余金の配当			△19,916		△19,916			△19,916
親会社株主に帰属する当期純損失(△)			△23,487		△23,487			△23,487
自己株式の取得				△246	△246			△246
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						8,262	8,262	8,262
当期変動額合計			△43,403	△246	△43,649	8,262	8,262	△35,387
当期末残高	395,950	230,000	2,412,010	△15,486	3,022,474	13,222	13,222	3,035,697

当連結会計年度(自 平成29年10月1日 至 平成30年9月30日)

(単位：千円)

	株主資本					その他の包括利益累計額		純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	395,950	230,000	2,412,010	△15,486	3,022,474	13,222	13,222	3,035,697
当期変動額								
剰余金の配当			△19,911		△19,911			△19,911
親会社株主に帰属する当期純損失(△)			△623,286		△623,286			△623,286
自己株式の取得				△30	△30			△30
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						△10,295	△10,295	△10,295
当期変動額合計			△643,198	△30	△643,228	△10,295	△10,295	△653,523
当期末残高	395,950	230,000	1,768,812	△15,516	2,379,246	2,927	2,927	2,382,173

(4) 連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成29年10月1日 至 平成30年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純損失 (△)	△25,247	△613,823
減価償却費	95,304	79,297
減損損失	3	573,229
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△2,120	△5,100
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	3,930	4,135
受取利息及び受取配当金	△1,109	△1,156
支払利息	10,199	8,749
為替差損益 (△は益)	△58	4
有形固定資産除売却損益 (△は益)	30,115	2,511
売上債権の増減額 (△は増加)	296,165	32,888
たな卸資産の増減額 (△は増加)	46,329	△58,814
仕入債務の増減額 (△は減少)	△251,994	61,176
その他	△25,250	△48,968
小計	176,268	34,129
利息及び配当金の受取額	1,109	1,156
利息の支払額	△10,199	△8,749
法人税等の還付額	716	-
法人税等の支払額	△4,880	△9,269
営業活動によるキャッシュ・フロー	163,014	17,266
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の払戻による収入	283,915	40,367
定期預金の預入による支出	△87,117	△66,881
有形固定資産の取得による支出	△81,001	△93,085
有形固定資産の売却による収入	20,690	-
無形固定資産の取得による支出	△7,116	-
投資有価証券の売却による収入	-	20,285
投資有価証券の取得による支出	△2,016	△2,061
保険積立金の積立による支出	△1,921	△637
その他	△3,744	2,810
投資活動によるキャッシュ・フロー	121,688	△99,202
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△191,500	205,977
長期借入れによる収入	281,700	-
長期借入金の返済による支出	△228,666	△179,385
リース債務の返済による支出	△21,608	△11,712
自己株式の取得による支出	△246	△30
配当金の支払額	△19,620	△19,672
財務活動によるキャッシュ・フロー	△179,941	△4,822
現金及び現金同等物に係る換算差額	58	△4
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	104,820	△86,763
現金及び現金同等物の期首残高	81,318	186,138
現金及び現金同等物の期末残高	186,138	99,374

(5) 連結財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前題に関する注記)

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

(セグメント情報)

1 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、主に当社の各事業部が取扱う商品・製品及びサービスについて国内及び海外の包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。

従って、当社グループは当該事業グループを基礎とした商品・製品及びサービス別のセグメントから構成されており、「函物及び機械設備関連事業」「介護関連事業」の2つを報告セグメントとしております。

「函物及び機械設備関連事業」は、ラック及びアーム関連製品の製造販売を行っており、「介護関連事業」は、居宅介護支援、訪問介護、訪問入浴、福祉用具貸与・販売、認知症対応型共同生活介護、通所介護等のサービスを提供しております。

2 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、連結財務諸表作成のために採用される会計方針に準拠した方法であります。

報告セグメントの利益は、経常利益ベースの数値であります。

3 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失の金額に関する情報

前連結会計年度(自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)

(単位：千円)

	報告セグメント			調整額 (注1)	連結財務諸表 計上額 (注2)
	函物及び機械 設備関連事業	介護関連事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	2,116,347	632,477	2,748,824	—	2,748,824
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	—	—
計	2,116,347	632,477	2,748,824	—	2,748,824
セグメント利益又は損失(△)	30,970	△26,098	4,871	—	4,871

(注) セグメント利益又は損失(△)は連結損益計算書の経常利益と一致しております。

当連結会計年度(自 平成29年10月1日 至 平成30年9月30日)

(単位:千円)

	報告セグメント			調整額 (注1)	連結財務諸表 計上額 (注2)
	函物及び機械 設備関連事業	介護関連事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	2,144,704	627,290	2,771,995	—	2,771,995
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	—	—
計	2,144,704	627,290	2,771,995	—	2,771,995
セグメント利益又は損失(△)	△38,915	4,439	△34,475	—	△34,475

(注) セグメント利益又は損失(△)は連結損益計算書の経常損失と一致しております。

4 報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報

前連結会計年度(自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)

(単位:千円)

	報告セグメント			全社・消去 (注)	連結損益計算書 計上額
	函物及び機械 設備関連事業	介護関連事業	計		
減損損失	—	—	—	3	3

(注) 「全社・消去」の金額は、報告セグメントに属さない当社の資産に係るものであります。

当連結会計年度(自 平成29年10月1日 至 平成30年9月30日)

(単位:千円)

	報告セグメント			全社・消去 (注)	連結損益計算書 計上額
	函物及び機械 設備関連事業	介護関連事業	計		
減損損失	440,022	10,784	450,807	122,421	573,229

(注) 「全社・消去」の金額は、報告セグメントに属さない当社の資産に係るものであります。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成29年10月1日 至 平成30年9月30日)
1株当たり純資産額	7,622.90	5,982.08
1株当たり当期純損失金額	△59.00	△1,565.14

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 2 当社は、平成30年4月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額を算定しております。
- 3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (平成29年9月30日)	当連結会計年度 (平成30年9月30日)
連結貸借対照表の 純資産の部の合計額(千円)	3,035,697	2,382,173
普通株式に係る純資産額(千円)	3,035,697	2,382,173
普通株式の発行済株式数(株)	402,000	402,000
普通株式の自己株式数(株)	3,766	3,782
1株当たり純資産の算定に 用いられた普通株式の数(株)	398,234	398,218

- 4 1株当たり当期純損失金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成29年10月1日 至 平成30年9月30日)
連結損益計算書上の親会社株主に 帰属する当期純損失(千円)	△23,487	△623,286
普通株式に係る親会社株主に 帰属する当期純損失(千円)	△23,487	△623,286
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式の期中平均株式数(株)	398,285	398,230

(重要な後発事象)

該当事項はありません。